

の凹所では溜つて居るのに不充分である、溜まつて居様としても後から來た水に押し出されてしまふ、こんな多量の水が岩石等に遇ふときは前の様に兩方にわかれないうでそれを跳び越えること競馬の馬の様で圓塔の屋根の様に岩石を被ふてしまふ。

水が凹所に流れ込むときも穴一杯には入らないで一方の斜面から流れ込んで他の斜面から流れ出すのが大波の上を浮沈する舟に似てゐる。

急流では其の快速力の爲めに水面に平行線が出来るが、水底が流水の線と一致しない所があると浪立つ、急流の浪は流れ來た方に向い、海水のは押し寄せて行く方に出来る。

海の波は縁の鋭い凸形の運動である、急流のは凹形から凸形に變ずる面白い曲線から出來て居る。(終り)

靜物寫生の話 (三)

大下 藤次郎

△其次には物質の配置である、靜物寫生も一二個の單純なものを寫すだけなら容易なものであるが、漸く進んで種々なる異つた材料を安排して寫生することになると、物質の配置にも注意を拂はなければならぬ。

△物質の配置とは、硬きものに對する軟かなもの、透明質に對する不透明質、粗なるものに對する滑らかなものといふ類である、そして一概にそうといふことは出來ぬが、通例光澤あるものや剛くして輪廓の鋭きものなどを注視點に近く置くことになつてゐる。

△靜物畫の稽古を續けてゆくには、絶えず材料を變へて何でも描き出せるやうに力をつけて置たい、一つのことを幾度も續けて充分研究を積むといふのはよいことではあるが、又其性質の異なつたものを描き現はす方法を知ること必要である。

△鐵瓶と薄團とは性質が遠ふ、絹布と木綿とは其感じが異ふ、靜物寫生の必要はそれ等の性質を充分描き出す力を養ふことにある、即ち鐵は鐵らしく、綿は柔らかに、絹布は光澤滑らかに、木綿は鈍重にといふやうに、其物質に應じて、さぞ暖かであらう、さぞ冷やかにあらう、硬からう、軟かであらうと、一見して其物の性質が見えるやうに正確なる描寫をなさねばならぬ。

△果物や野菜を畫いて水氣のない干乾らびたものになつたり、魚は干魚となり、生花は造花と變じ、木綿の布が毛織物に見えたりするのは珍らしくない例である。靜物寫生は繪畫の第一歩であるから、其畫いたものが紙の上に繪具と見えてもいけぬ、繪と見えてもいけぬ、誰が見ても實物と見えるまで進んで研究しなくてはいけぬ。

△靜物畫研究の位置の取り方については前にも言つたが、初學の人のやり方は、目的物を真中へ小さく畫いて餘白を多くする傾きがある、研究は目的物が主である、後ろの布地など多く出すとそれを描くために徒らに時間を消費せねばならぬ、それゆへ時によつては目的物の一部分は畫面の外へ出ても構はぬ、學校の試験の時のやうに、大きな紙の中へ小さなものを描くのは醜いばかりでなく何の稽古にもならぬ。

△以上で靜物寫生の心得は粗ぼ盡きた、これから極初學の人のために、鉛筆畫より一色畫、着色畫といふ風に個々について説明を試みてゆく、但前の講話と重複する處もあるが、出来るだけ詳細にお話するには止を得ぬことである。

△先づ墨畫からいへば、繪を學ふに一番輕便な材料は鉛筆である、鉛筆は輪廓をとる稍々硬いのと、實體を畫く軟かなのと二本あればよい、普通前者にはHB後者はBB印を用ひる、イーグルの140號などは輪廓にも蔭影にも使用することが出来る。

△紙はB印の畫洋紙がよい、ワットマンやケントは仕上げが美しく出来るが、紙が硬過て面白い調子が出ない、其他に畫板と留鋏とゴムとあればよい、畫板は畫用紙四ツ切大のがよい。